

清水考純「悪魔のヴォードヴィル ―『悪霊』における悪魔の戦略―」を聴く

長瀬 隆

2000年わが国で行われた国際研究集会記念講演会（早大）の講演者には日本側を代表するような形で清水考純氏の名前がみられるが、私はこれを聞いてはいない。同日同一会場で別の時間（午後）に行われたサラースキナの報告は聞いていて、終わりに近づいて「革命の地下活動の魂を解明して」云々の引用が始まり、私は即座に（通訳を待たずに）それがペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』（1912年モスクワ、1989年長瀬により全訳）のなかの一編「ドストエフスキーと革命」（1922）からの引用であることに気づき、すくなくとも意外な感を覚えた。というのも「ドストエフスキーの終末論―地獄の克服」というその演題からペレヴェルゼフの引用が出てくるとは予想しなかったためである。そして、短くはなかったその引用が「とマルクス主義の批評家ペレヴェルゼフは…書きました」とマルクス主義者であることが賞賛的に注釈されていてさらに驚いた。（清水報告も含め全文は「広場」の2011年の10号に掲載されている）。

会場を去る前に彼女と話す機会があり、「あの論文はまだ復権していませんね」と私が質すと、「私が出しました」とたいへん誇らしげに即答した。自身が住むサントペテルブルクでは出せなくて、二、三年前にどこかの地方都市で、『悪霊』関係で未復権の論文をまとめて出したさいに、もっとも重要なものとして収録したとのことだった。ペレヴェルゼフは二十年代末に社会的に葬られて後、没後、1982年に『ドストエフスキーの創造』を始めとした主要論文が、また続いてさらに数編が加えられて九〇年代に刊行されている。しかし弾圧のきっかけとなった「ドストエフスキーと革命」その他の復権を知ったのは実にこのときのことだった。（1931年に早大露文科の『露西亜文学』研究に岡沢秀虎によって初訳載されており、小林秀雄は『ドストエフスキーの生活』のなかで二か所にわたって援用しているが）。

『ドストエフスキーの創造』は、一九〇五年の革命挫折の後、一〇一七年の成功がまだ予測できなかった時期に執筆された、優れて先見的なマルクス主義的著作である。唯一の弱点はスタヴローギンとヴェルシーロフへの言及が不足していることであるが、これは当時の文献的制約によるものだった。革命後ペレヴェルゼフはボリシェヴィキ党の代表者としドストエフスキー文庫の解封にあたり、初めて「スタヴローギンの告白」を読み、『悪霊』への理解を深めた。かくて1922年、生誕百年記念の行事を主催し、基調報告をおこなった。革命後の現実のなかで目撃することになった小市民的な、すなわち左翼小児病的な「革命性」の噴出が、『悪霊』において予見されていたことを示し、その剔抉の必要を説いた、全編が『悪霊』論である「ドストエフスキーと革命」が出現した。そしてその年の『ドストエフスキーの創造』の革命後の初に、「序文に代えて」と括弧して注記しそれをまさに冒頭に掲げた。（拙訳書では時間性を配慮して末尾に掲げている）。「悪魔のヴォードヴィル」の語は『悪霊』ではキリーロフの言葉として出てくるのであるが、『創造』

本体の時点でペレヴェルゼフにはこれには触れず、1922年の論文の時点で、これが『悪霊』の創作方法となっていることを指摘したのだった。このことの重要さはサラースキナによっても十分には把握されてはいない、と私は考えてきた。

こうした経緯がある以上。私は清水報告の表題に格別な関心を抱き傍聴したのは当然だった。しかしすぐに氏がペレヴェルゼフについては何も知らず読まずに話されていることが分かった。私としては不満だったが、退屈することはなく、最後まで謹聴している。それはなぜだったか。

ソ連崩壊後ドストエフスキーをヨハネ黙示録に引き付けて論ずる一般的な風潮が存し、それは『チェルノブイリの祈り』のアレクシェーヴィチにまで及んでいる。しかし、この書の全面的否定者に、第一次世界大戦後のロレンスがあり、私は『ドストエフスキーとは何か』(2008, 成文社)ではこれを援用している。清水氏のニューレター上の著者紹介にはロレンス関連の論攷があることが述べられていて、これが聞けるのではないかと期待したからだった。

ドストエフスキー文学のヴォードヴィルの手法は『悪霊』で突然現れたではなくて、『ステパンチコヴォ村』の退役大佐ロスターネフその他に早くから現れていたとする指摘は正しかった。しかしそれ以上に重要なのはドストエフスキーには出発当初から変装趣味があったことで、第二作には「貴族出の乞食」だの「仮面」等の言葉が散見される。小市民を主人公として出発しつつ、地主貴族をも登場させなければならなくなって、作家はこれを利用・実践している。すなわち精神内容において小市民の人物に地主貴族の衣装を纏わさした。その嚆矢がロスターネフであり、以後、ムィシキン、スタヴローギン、ヴェルシーロフと続く。それは作中(記録)作家の登場と手を携えており、両者は密接不可分の関係にあるのだが、清水氏はこれを「悪魔の策略」と捉えているようだ。とすると『悪霊』では登場人物でもある「私」=アントン・ゲーこそが「策略者=悪魔」ということになるのであり、私はこの人物こそもっとも論じられなければならない存在と考えてきた。しかし清水氏はその前で立ち止まっているように見受けられる。

「感情移入することの出来る人物の欠如」と作品の特徴が定義されたが、集団による一人の元同志の陰惨な殺害を主題としている以上、仕方のないことであつた。しかしそれさえもヴォードヴィルとして描こうとしたのであつて、悲憤慷慨していない作者の冷静な手さばきは、やはりスゴイと思わざるをえない。清水氏の問題提起は先行者としてはペレヴェルゼフがいるだけの珍しい試みであつて、この会では話題になること少なかったキリーロフに焦点を当てたことが非常に良く、チャーホフへの言及を含め、私としては共感して聴いた箇所は多々あつた。謝意を表明する次第である。

May 24, 2017